特集　日本研究の道しるべ――必読の一〇〇冊

文学（近現代）　Literature (Modern/Contemporary)

西田谷（にしたや）洋

キーワード：アフター・セオリー、盲点、読書、書物、テクスト、文体、感覚、無意識、構成、複数性

はじめに

日本文学（近代）研究のブックガイドを行うにあたって、本稿では二〇〇六年から二〇一六年の十年強の時期に区切ることにした。それ以前に刊行された古典的な名著はそれこそ既に知れ渡っており、ここでは近年刊行された研究書から八冊を選ぶことにする。

現在はアフター・セオリーの時代と呼ばれているが、それはテクスト内的な精読アプローチの衰退とテクスト外的な資料的アプローチの隆盛を意味するわけではない。日々刊行・発表される論文集や論文を見ても、作品論からテクスト論へ、新歴史主義から文化研究へという単線的な研究方法の展開という構図では捉えられない、様々なアプローチの併存・拮抗（きっこう）がそこに見いだせるはずである。資料を見ないことによる盲目と読解方法の無自覚さによる盲目とは常に分析・考察の際に生起しうる。ある方法を選択することは対象や研究目標との相関によって決定されるのであって、優劣があるわけではない。本稿においても、そうした認識のもと、多様な方法を用いた研究書の紹介を行う。その際、当該書の著者の他の著書から／への流れも概観する。

一　書物と読書の場

文学は読書によって意味づけられる。しかし、読解方法のみなら

ず書物もまた地域的・歴史的に均質なかたちで確保されていたわけではなかった。書物が読者にたどりつくプロセスに目を向け、その可能性を解明していく必要がある。ここでは和田敦彦（あつひこ）・日比嘉高・両氏の著書をとりあげる。

和田敦彦『読書の歴史を問う――書物と読書の近代』（笠間書院、二〇一四）

和田氏は読書論研究をリードする存在と言えよう。『読むということ――テクストと読書の理論から』（ひつじ書房、一九九七）では認知としての読書理論の模索を行い、『メディアの中の読書』（ひつじ書房、二〇〇二）では読書を構築・制約するメディアの多層性・歴史性を捉え、『書物の日米関係』（新曜社、二〇〇七）・『越境する書物』（新曜社、二〇一一）では米国図書館の日本語蔵書形成から書物と読者を媒介するリテラシー史を展開するというように、氏の軌跡は理論から実証へと展開を遂げている。

氏の読書論、すなわちリテラシー史のガイドブックたりうる本書では、読書を読者が書物を理解するプロセスと読者が書物にたどりつくプロセスに二分し、従来の研究の中心であった前者に対し後者の大きな領域を検討する。

一章「読書を調べる」は読書研究の理論的枠組み、九章「読書と教育」および十章「文学研究と読書」は国語教育・日本文学の研究法を概観し、二章「表現の中の読者」は書物の形態を含む表現理解から読み出される読者を検討する。そして本書の中核となるのは、たどりつくプロセスとして書物の獲得・管理・提供を扱う三～八章である。

三章「読書の場所の歴史学」は読書を制約する場として鉄道・監獄・軍隊・図書館・移民地など閉鎖的な読書空間における読書の諸相を検討する。四章「書物と読者をつなぐもの」は書物の仲介者の個人史から日米の書物の交流を通して書物の移動や蓄積がもつ政治的・社会的意味を問う。五章「書物が読者に届くまで」は書物と読者をつなぐ書物流通（取次や教科書が児童生徒に届くプロセス）と販売を探る。一方、六章「書物の流れをさえぎる」は書物を遮る検閲の問題として戦前の検閲や戦後ＧＨＱの書物の接収を取り上げる。七章「書物の来歴」では、書物と読者の関係が書物の移動によって変質する事例として日米の書物の移動やサブカルチャー大衆娯楽雑誌への関心が示され、八章「電子メディアと読者」では、一つの書物が複数の読者と同時に接続しうる電子メディアをとりあげることで、新たな情報環境における読書が検討される。

前著『書物の日米関係』でリテラシー史は、Ａ、読者の形成、Ｂ、書物の獲得、Ｃ、書物の管理・提供、Ｄ、書物の形態として構想され、本書でもほぼそれはカバーされている。その際、Ｃ、すなわちたどりつくプロセスが重視され、書物・読書・読者が歴史的・社会

的に多様に分節化されていく。読書の歴史研究を、書物が読者に至るプロセスの形成・成長・変化・制約の歴史と捉えることができるとすれば、本書では書物の流れの歴史を通して書物と読者の関係が問われているのである。むろん、著作権をめぐる問題などたどりつくプロセスに含まれるべき問題も他にあり、リテラシー史もまたその都度の読解の理論の視野・射程とその蓄積の産物でもあるとすれば、さらなる飛躍・拡大が期待されるはずである。

日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ――移民文学・出版文化・収容所』（新曜社、二〇一四）

『〈自己表象〉の文学史――自分を書く小説の登場』（翰林書房、二〇〇二）は自己表象が文学、絵画、倫理学、読書慣習等の変動と展開によっていかに登場し、明治末の文化空間にいかにに展開したかをたどり、本書に続く『文学の歴史をどう書き直すのか――二〇世紀日本の小説・空間・メディア』（笠間書院、二〇一六）では空間・文学史・メディアをテーマに文学研究を捉え返す。

本書の背景となる北米移民は一八八〇年代に始まり、一九〇〇～一〇年代には渡米熱がピークになり定住志向も高まった。この傾向は一九二四年頃まで継続したが、第二次大戦中に日系移民は強制収容所で生活することを余儀なくされる。本書が扱うのは、日系アメリカ移民の日本語による文学活動であり、それを支えていた移民地の日本語新聞や日本書店、そして収容所図書館といった文化的基盤である。そして、本書は、「アメリカ移民の書く文学は日本文学かアメリカ文学か」という問いを、移民をいずれかの国に帰属させる思考として退け、移民文学の営みに目を向ける。

本書は全四部構成である。第一部「アメリカに渡る法」では、渡米をうながす言説、渡米物語の想像力や船旅で読まれる文学について検討される。第二部「サンフランシスコ、日本語空間の誕生」では文学に必要な環境として、人とモノと情報のネットワークたる日本語移民新聞や日本語書籍店の動態が検討される。

第三部「異土の文学」では初期移民文学、殖民論と郷土小説、在米文学の描かなかったもの、転落の恐怖、自然主義文学の移民文学的展開が取り扱われる。とりわけ、『あめりか物語』を日本人作家永井荷風による異文化観察の記録としてではなく、潜在的移民の文士志望者「永井壮吉」による、将来の行方も定かではない彷徨が映し出されたものとして論じられる。むろん、荷風は上流の移民者たちを観察しつつ、日本の文壇作家として移民文壇とは距離をとっていたわけで実態とは異なるが、その潜勢態が示される。

第四部「移動の時代に」では渡米花嫁、一世作家翁久允（おきなきゅういん）の移民地文芸論、二世作家中島直人の望郷、収容所がとりあげられる。有島武郎「或る女のグリンプス」のヒロインを写真花嫁のような渡米女性の類型として捉え、男性の移民史とは異なる視座を提供する。

また、収容所での表現である旅と便りのモチーフから、家族とは離ればなれにならざるをえない収容も移民も、同じく旅のメタファーとして捉えられることを示す。

こうして、本書は一世から二世へという発展史観を避け、作品の多様さ、概念や作品相互の複雑な交渉をたどる。それによって、移民と日本人という二重性を生きる移民作家の人の移動、文学の越境という横断の詩学が展開される。とすれば、当時のアメリカ文学との相関関係も検討することによって、より充実した視界が示されるのではないだろうか。

二　テクストと文体

作品あるいは文学という統一性は確かなものだろうか。テクストの様々なバージョンの可能性を探る生成論はそれに異議を唱え、文体に概念とジャンルがいかに相互交渉していくかを探るアプローチは様々な変化の契機を見いだしていくだろう。

戸松泉『複数のテクストへ――樋口一葉と草稿研究』（翰林書房、二〇一〇）

戸松泉氏は『小説の〈かたち〉・〈物語〉の揺らぎ』（翰林書房、二〇〇二）において、物語構造をおさえることで小説の新たな解釈を試みる。氏の分析の特徴は語り手の実体化と倫理性、了解不能の他者といった概念を到達不可能性の枠組みで用いるように、情緒的な解釈の枠組みに難がある。しかし、氏なりに作家論的に作品解釈に誠実に向き合おうとして本書で導入されたのが生成論である。

生成論は（刊本以前の）樋口一葉の草稿テクストの各バージョンごとの独自性・固有性を評価する。しかし、それを時系列的な因果関係に回収しようとするとき、旧来の作家論的な改稿研究と同じ帰結へと陥ってしまう。さらに生成論は各バージョンを解釈するゆえに、その解釈の方法が検討されなければ、何のために生成論を名乗るのか、その意味が問われよう。その解釈は生成論を導入する前から決まっていたのではないか。そうした問題は、「宿命」といった、解釈／研究の対象からはおよそ出てくるはずのない言葉が見られる本書にもつきまとう。

本書の目的は、生成論の方法を検討し有効性を獲得することと、生成論によって一葉を中心とする草稿を分析・評価することにある。そうした理論的な問題は第一部「生成論の探求へ」で検討され、以下、たとえば第二部「複数のテクスト」では、「たけくらべ」掲載稿と再掲載稿の比較から子供たちへの理解と同情にいたる語り手の変化を読み取り、第三部「樋口一葉と草稿研究」では「軒もる月」の生成過程に自伝的要素を払拭する動きを発見して作家的営為にお

いて重要な小説とし、また「この子」を近代的夫婦を扱った小説として読むことで、家父長制強化という時代の鏡とするだけでなく現在の状況に警鐘を鳴らしている。そして第四部「「語りのレトリック」を読む」では漱石・太宰・荷風が論じられる。

本書では、生成論がえてして陥りがちな執筆過程や推敲過程の検討からの脱出、活字稿の相対化とバリアントの検討が目指されている。むろん、本書は論文集成であるため、方法論的な統一が施されているわけでもない（たとえば初期の論考では、因果論的に最終稿の解釈を補強するような方法論が用いられている）。しかし本書には、成立過程という線状的な研究から離陸し、草稿を複数の本文という並列するテクストとして読むことで、書き手の書記行為の揺らぎを対象化する方法に氏が到達した軌跡が示されている。とすれば、バリアント論としての可能性の中に本書を評価すべきだろう。そこにはグレアム・アレン『間テクスト性――文学・文化研究の新展開』（研究社、二〇〇二）や亀井秀雄「テクスト・生産システムとしての文学史」（『明治文学史』岩波書店、二〇〇〇）との連携の道も見えてくるからである。

谷川恵一『歴史の文体 小説のすがた――明治期における言説の再編成』（平凡社、二〇〇八）

前著『言葉のゆくえ――明治二〇年代の文学』（平凡社選書、一九九三）では、明治二十年代の文学作品の言葉に注目し、同時代の文化のコードで様々にその意味をずらすことで、文学空間の広がりを喚起させた。第二著である本書は、文体ジャンル意識による小説（と歴史）の形成過程をたどる。

第一部「歴史叙述と文学」は歴史叙述と文学の交渉を扱う。漢文で書かれていた歴史がそれ以外の文体で書かれるとき、漢字カナまじり文は漢文のエクリチュールと親和性を持ちつつ、立身出世の欲望を共有して支配的な力を持つ。歴史も一枚岩ではなく西洋史は歴史を story とし、歴史を説話とした日本（史書）の言説秩序を崩し、翻訳史書は非説話的な story の可能性を示す。また、正史たらんとする伝記は小説との文体的な距離が近くジャンルの変動の可能性が示される。

第二部「小説のすがた」は小説の文体が問われる。雅文体と仮名体が混合した両文体で、ふりがなは雅文体と仮名体を翻訳していたが、ふりがなが消えた小説の文体は潜在的な両文体となり、作者の声と読者の声が溶け合う同質的な読書経験が成立する。また、虚構の語りの場の描写・設定と現実の密室での読書の対応や、裁判供述書や翻訳文学で用いられた「自分」という一人称や異国の女の言葉は、自由間接話法を含め、真実らしさをめぐる言説編成をもたらすとする。

第三部「歴史と物語」は歴史と物語が検討される。幕末維新の志

士の行動は歴史たらんとしてその彼方たる物語へと逸脱し、志士の歌と事跡を語る書物の中で歌はその人と結びつけられる。また虚無党に民権運動を二重読みさせる宮崎夢柳の小説は、社会と対峙する個人としてのニヒリストである女性のあり方を、経済と同等の重みを持つ恋愛を媒介として描くと説く。

物語表現、文体の構造・ジャンル変動と読者形成の相互作用的なダイナミズムが本書の魅力である。言説分析では作品としての物語内容への耽溺（たんでき）は慎重に回避される。

三　無意識と感覚

理性・知性とは異なる無意識あるいは感覚を対象とすることで、歴史的・文化的な文学・文化の体制を明らかにしていく。こうしたアプローチから理性や認識をささえる根源という情動論に近接することになる。ここでは坪井秀人・一柳廣孝両氏を取り上げる。

坪井秀人『感覚の近代――声・身体・表象』（名古屋大学出版会、二〇〇六）

前著『声の祝祭――日本近代詩と戦争』（名古屋大学出版会、一九九七）の中核たる、モダニズム詩人たちの戦争協力詩の朗読に見る文字言語と音声言語の葛藤という構図は、いわば視覚と聴覚の対立でもあり、本書の問題意識につながる。同時期の『戦争の記憶をさかのぼる』（ちくま新書、二〇〇五）が前著の戦争と文学との関係を敗戦後の歴史をたどり直すことで確認し、後の『性が語る――20世紀日本文学の性と身体』（名古屋大学出版会、二〇一二）が本書でのジェンダーへの関心を、主体の外部の枠組み、あるいは非主体的な作用としての性表象として捉えるものだとすれば、坪井氏の仕事は狭義の日本近代文学史研究を大きく超える試みである。

第一部「感覚の近代」は、近代化において形成される視覚中心主義という感覚の階層化で見えなくなる様々な感覚を文学者・芸術家個人のレベルで捉える。視覚の相対化として第一章では『吾輩は猫である』を観相学の投影として読み直し、近代個人の観察・理解の一方向性を捉え、第二章では『彼岸過迄』の都市空間における観察者の感覚が検討される。第三～四章では室生犀星と萩原朔太郎をとりあげ、視覚では理解困難な都市の表象や自己消失の表象としての写真について論じる。第五章は谷崎潤一郎を通して、登山が異界・異人を消失させ、山人表象が同化の力学として機能していることを指摘し、初期映画に喪失した異界のアウラを見いだす。第六章では触覚表象として指を捉え、第七章は視覚と触覚の対立にさらされる裸体表象のジェンダー性を検討し、第八・九章は蒲原有明や田村俊子を通して嗅覚にまつわる都市・身体・ジェンダーの問題をとりあ

げる。第一部では、観察者によって女性や街が解読すべき対象とされ、幻影と写真や映画との関係が示されると共に、対象を見る視覚の主体と対立的に嗅覚や触覚によって感覚の近代を相対化する動きが見いだされる。

第二部「歌う身体」では、音楽・舞踏を家庭・学校・国民といった体制集団に関わる感覚表象として検討する。特に第二章では、近代の民謡は国民主義イデオロギーの喧伝を目的とする構築物であり、自然発生的な民衆の声ではなかったことを、民謡の文化のプロセスをたどりながら明らかにする。すなわち、第二部では、地方と民謡の相関から原民謡として国民性へと至る径路が探求され、高度成長期のふるさとの歌への志向性へと繋げられる。すなわち、北原白秋や『赤い鳥』等、民衆に国民性を充塡し、国体幻想による新たな自然の仮構としての歌謡ジャンルを近代に創出する過程がたどられる。その際、少女を主役とする童謡・舞踊が見せる身体として捉えられ、メディアを通して現代の心性を構成するにまで至る。

文化史的な変容をたどってみせる本書の、資料の博捜によるイデオロギー暴露は明快な記憶や近代をイメージすると共に、言説以前の制御されない側面をアウラとして捉えることを目指す。とすれば、今日の情動論へと至る階梯としても本書を位置づけられよう。

一柳廣孝（いちやなぎひろたか）『無意識という物語――近代日本と「心」の行方』（名古屋大学出版会、二〇一四）

科学とは一見、誰しも正しいものと見るが、様々な学説・知見の対立・交替の歴史を見れば科学といえども事実ではなく思想・イデオロギーである。そうした、人々が疑うことのない科学に潜むいかがわしさと文学との相関を「無意識」を通して可視化していく。

第一部「無意識の時代」は、心身二元論に基づく魂の属性としての心が、脳内現象としての心に変化していくなかでのアカデミズム／ジャーナリズムにおける無意識の概念からフロイト受容をたどる。第一章では、キリスト教による超越的な内面への注目と意識の構造を捉える心理学導入に伴い、西周が「意識」概念の使用に至り、漱石が意識／無意識の境界領域へ注目するようになったことをとりあげる。第二章では、催眠術が民間療法等に生き延び「無意識」・「副意識」・「潜在意識」等の用語が流布していく様を、第三章では、実験心理学によって変態心理学が排除され、フロイトの無意識理論がその空白を埋めるものとされたこと、第四章では、夢解釈で無意識に迫るフロイトが、反発されつつも魅力的な解釈装置として芥川の無意識表象にも影響を与えたことを論じる。第五章では、無意識理論が普及する際に雑誌『心理研究』が果たした役割と、姉妹誌『変態心理』に精神分析が組み込まれ精神分析が周縁化されていく様を明らかにする。

第二部「芥川龍之介と大正期の「無意識」」では、持続的に無意

識表象に取り組んだ唯一の大正作家芥川から探偵小説へと至る径路が探られる。第六章では、芥川没後初の全集で、既発表作品「死後」が未定稿扱いとなりフロイトへの記述が削除されることに、同時代の精神分析受容の問題を見いだす。第七章では夢の取り込み方の一例として「奇怪な再会」をとりあげて神秘の表出とし、第八章では無意識を夢で暗示する作品群を読解する。さらに第九章で、最晩年の草稿に夢の言葉の達成をみる。第十章では武者小路のメーテルリンク受容と芥川を対比し、第十一章では妖婆の可能性を民俗学と心霊学と神経の交錯する幻想文学として模索し、第十二章では「二つの手紙」を通して芥川の探偵小説的主題の抱えた不安を問うている。補論では小酒井不木（ふぼく）から江戸川乱歩に至る探偵小説と不安を探る。

本書では資料引用を積み重ねる中に、文学者のテクストが組み込まれている。氏の『〈こっくりさん〉と〈千里眼〉――日本近代と心霊学』（講談社選書メチエ、一九九四）、『催眠術の日本近代』（青弓社、一九九七）、あるいはライトノベル研究では、文学のマージナルな領域をとりあげ、そこに働く力学を歴史資料・文学作品の読解を通して明らかにしてきた。本書の第二部は芥川という特権的な固有名を扱うが、それも後に続く無意識表象・心理的主題の結節点としてであって、既存の作家論的な枠組みを固定化するためではないことは注意しておく必要がある。

四　構成と複数性

しかし、そうした歴史的なアプローチのみに意義があるわけではなく、現在的に新たな視点からテクストに価値を見いだすことも可能である。また、これまで触れた著書が男性の文学史・文化史を構成していたとすれば、女性を複数性のもとに捉えるアプローチにも意義が見いだせよう。

中村三春『花のフラクタル――20世紀日本前衛小説研究』（翰林書房、二〇一二）

氏は、『フィクションの機構』1・2（ひつじ書房、一九九四・二〇一五）では、言語は根元的に虚構であり、その延長線上に文芸の虚構が実現されるという根元的虚構論を提唱する。『修辞的モダニズム――テクスト様式論の試み』（ひつじ書房、二〇〇六）では比喩・擬人法・寓意などのレトリックや、断片性・モンタージュなどのテクスト形態に注目することでテクスト様式論とし、『係争中の主体――漱石・太宰・賢治』（翰林書房、二〇〇六）では、複数的な論理を論述の基盤としてテクストの不確定性・両義性を解明する。そして本書に続く『〈変異する〉日本現代小説』（ひつじ書房、二〇一三）では、テクスト生成にまつわる小説の〈変異〉と、読解

の営為における〈変異〉とを連動させる。

前衛小説は通例、新興芸術派の小説がそれと見做されるが、本書では芸術的前衛と政治的前衛の双方の小説がとりあげられる。

第一部では、久野豊彦のフラグメント集積の小説を、音声と映像をカットバックさせるモンタージュによる想像上の映画と捉え、貨幣と芸術の類似性に基づくダグラス経済学の信用理論と結び付いた独自の文学理論を評価する。また第二部では横光利一を読者に受容可能な限界程度に調整されたアバンギャルドに、第四部では太宰治を発病するメタフィクションに、第五部では森敦を二十世紀後半のアバンギャルドに定位する。また、第六部では、「モダニズムと身体」という切り口から、江戸川乱歩の探偵小説や中河与一の偶然文学論、葉山嘉樹の多重包含構造や小林多喜二の映画的エクリチュール、モンタージュ的構成が分析される。

このとき、様々な前衛小説を統一的な視座のもと評価する装置として採用されたのがブノア・マンデロのフラクタル概念である。それを体現するのが堀辰雄を論じる第三部である。『美しい村』――それ自体美しい絵のような物語「美しい村」執筆を語るメタフィクションであり、「私」が出会い「美しい村」の物語にも登場する少女のキャンバスには美しい村が描かれている――を、時空間的に拡大・縮小しても同じ形象・文体が反復し、テクスト全体と細部が相同性を持つフラクタルとして捉える。

本書は単純なイデオロギーや時代性、作家情報、文化研究のコードで小説を読むことに禁欲的であり、小説は確定した統一体と捉えることが困難で、フレームによって全く異なった結果が抽出されるとすれば、テクスト様式が全てであって対象テクストを受け入れることが必要と提言する。本書はその意味で日本近代文学研究でのテクストの理論的分析の到達点の一つである。一方で、フラクタルはそれをフラクタルと見たい時に制作されるのであり、氏が後続書では〈変異〉をとりあげているように、相同関係とされるものにも変異があるとすればさらなる理論的検討が必要とされよう。

飯田祐子『彼女たちの文学――語りにくさと読まれること』（名古屋大学出版会、二〇一六）

『彼らの物語――日本近代文学とジェンダー』（名古屋大学出版会、一九九八）では日本近代文学のホモソーシャルな読者共同体の成立とジェンダー化のプロセスをたどってきた。本書は、フェミニズム批評をジェンダー批評で乗り越える点では前著と同じ理論装置であるが、その際、単一・均質な男性に対して女性を「彼女たち」という複数の差異として捉え返し、差異を節合させる場として共同体を浮上させていく。

序章「〈女性作家〉という枠組み」では、ジェンダーは社会的に構築され、再生産によって規範化されるが、個人のジェンダー再生

産は不完全なためジェンダー規範は常に変動し、女性は均質ではなく様々な差異によって重層的多元的に構成されるという。フェミニズム批評は、女性作家を特権的で揺らぎのない主体とするが、女として書く主体は規範から逸脱しつつも女というカテゴリーと交渉せざるを得ない。書くことは亀裂の感覚を生きることであり、女として書くことは不安定なアイデンティティに生きることであるとして、不安定で亀裂の入った主体の不完全性において、読まれることに晒されている感覚という被読性、呼びかけられることへのずれた応答という応答性が、主体が書く場でマイノリティであることから生じるとする。

第一部「応答性と被読性」では、近代文学が制度化される中で女性の書き手が周縁化されるさまが検討される。田村俊子、円地文子などを事例に、書く主体は書くことで作家の自己像を作っていたのに、女性作家は書けないことを書いてアイデンティティの分裂を表現したと捉え、水村美苗、松浦理英子などは読まれることへの抵抗や書き手と読み手の関係の攪乱によって、近代文学という制度を組み替えていくと評価する。

第二部「〈女〉との交渉」は、賢母・良妻・主婦・女学生、師弟関係、表現構造、フェミニズム等によって女のカテゴリーは多様で複数化されたものとして捉えられるとする。『女学雑誌』の読者共同体の成立をめぐる検討も興味深い

第三部「主体化のほつれ」は奥村五百子、牛島春子、林芙美子等を事例に女性テクストに発動する国民国家制度の亀裂・きしみをあぶり出す。

第四部「言挙げするのとは別のやり方で」は、田村俊子、尾崎翠、多和田葉子を事例に、主体のジェンダー化に忘却される情動が断片的に浮上する様や、歩く身体感覚の中に言葉の運動性とジェンダー・カテゴリーの関係を探るなど、言葉が帯びている身体感覚から、言葉を発する主体のあり様を検討する。

とすれば、一枚岩とされる男性もまた複数化・差異化されてしかるべきではないだろうか。また、女性が自分らしく生きることをフェミニズムとすれば、それとは異なる方向性が本書では目指される。そこには新自由主義や伝統性など、必ずしも女性を利するものとは限らない要素も代入されてしまいかねないが、その問題提起を受け止めたい。

補足ブックリスト

日本文学（近代）の代表的な研究書を二〇冊リストアップした。

広瀬正浩『戦後日本の聴覚文化――音楽・物語・身体』青弓社、二〇一三
井原あや『〈スキャンダラスな女〉を欲望する――文学・女性週刊誌・ジェンダー』青弓社、二〇一五
石川巧『高度経済成長期の文学』ひつじ研究叢書（文学編）4、ひつじ書房、

二〇一二
木股知史『画文共鳴――『みだれ髪』から『月に吠える』へ』岩波書店、二〇〇八
小林洋介『〈狂気〉と〈無意識〉のモダニズム――戦間期文学の一断面』笠間書院、二〇一三
小松史生子『探偵小説のペルソナ――奇想と異常心理の言語態』双文社出版、二〇一五
牧義之『伏字の文化史――検閲・文学・出版』森話社、二〇一四
松澤俊二『「よむ」ことの近代――和歌・短歌の政治学』越境する近代11、青弓社、二〇一四
村上陽子『出来事の残響――原爆文学と沖縄文学』インパクト出版会、二〇一五
中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか――ジェンダー・階級・アイデンティティ』青弓社、二〇一三
内藤千珠子『愛国的無関心――「見えない他者」と物語の暴力』新曜社、二〇一五
内藤由直『国民文学のストラテジー――プロレタリア文学運動批判の理路と隘路』双文社出版、二〇一四
小平麻衣子『女が女を演じる――文学・欲望・消費』新曜社、二〇〇八
大原祐治『文学的記憶・一九四〇年前後――昭和期文学と戦争の記憶』翰林書房、二〇〇六
大澤聡『批評メディア論――戦前期日本の論壇と文壇』岩波書店、二〇一五
副田賢二『〈獄中〉の文学史――夢想する近代日本文学』笠間書院、二〇一六
高橋修『明治の翻訳ディスクール――坪内逍遙・森田思軒・若松賤子』ひつじ研究叢書文学編7、ひつじ書房、二〇一五
竹内瑞穂『「変態」という文化――近代日本の〈小さな革命〉』シリーズ文化研究3、ひつじ書房、二〇一四
富塚昌輝『近代小説（ノベル）という問い――日本近代文学の成立期をめぐって』翰林書房、二〇一五
友田義行『戦後前衛映画と文学――安部公房×勅使河原宏』人文書院、二〇一二